



Vamos juntos



No.2

文責 小坂佑騎

弓場農場にお世話になっています

8月9日（金）に第一アリアンサ村に赴任しました。そこから1週間、弓場農場（以下 ユバ）でお世話になっています。そこで、弓場農場について少し紹介します。

弓場農場は、第一アリアンサ村の中にあり、弓場勇さんが開いた農場です。ユバでは、多くの人が共同生活をし、日本語と日本の文化をととても大切にしており、日常生活では日本語を使っています。ここで生活をしていると、ポルトガル語を聞く方が珍しいです。もちろん、対外的なことはポルトガル語であり、ユバの子どもたちも学校へ行けばポルトガル語による授業なので、ポルトガル語も話せます。またユバでは、旅行者の方の受け入れもしており、宿泊場所だけでなく食事も提供していただきます。驚きなのは、宿泊費を取らないというところです。その代り、ここで生活を共にする人は全員農作業や掃除などの仕事をします。私が到着したときには、日本からの旅行者の家族や、ブラジルに住んでいる日本人、世界一周をしている日本人の大学生など、日本人が大勢いました。私も彼らと一緒に農作業のお手伝いをしました。ユバでは、牛、豚、鶏などの畜産や野菜、果物な



滞在した宿泊棟



牧場



トラクターに乗って



お風呂

ど、幅広い生産を行っています。先日、食事の準備を見せていただきましたが、豚肉も解体するところから料理が始まっていました。

あえて、写真にお風呂を載せたのは、ブラジルでは湯舟がほとんどなく、ユバに来て感動したものの1つだからです。（今後もユバについて少しずつ紹介していきます）

日本語学校での活動開始！

第一アリアンサ日本語学校での活動が始まりました。ここに通う児童、生徒は第一アリアンサ村の日系4世、5世の子どもたちです。日常生活での言語がポルトガル語で、日本語を使う機会がほとんどないため、日本語の得意不得意はありますが、みんな一生懸命勉強をしています。多くの生徒が、将来日本に行ってみたいと思って勉強をしています。また、JICAの日系研修という制度で日本に行くチャンスがあるので、その試験に合格するために、スピーチや作文の練習に力を入れる生徒もいます。いずれにしても、日本へのあこがれをもって、意欲的に勉強している生徒がほとんどです。そんな生徒を見ていると、日本語のレベルを上げて、いろんなチャンスに挑戦してほしいとともに、ぜひ日本での生活を体験してほしいと強く思います。

日系社会を大切にしたい

アリアンサは第1から第3までの3つの村があり、第一アリアンサが長野県、第二アリアンサが鳥取県、第三アリアンサが富山県と、入植にあたり、それぞれの県が出資してできています。

4月にNBSで放送された「ブラジル・アリアンサに立った信州人」で、全アリアンサの会長さんがおっしゃった「母国を忘れた移住は意味をなくしてしまう」という言葉を聞いて、はっとしました。日系社会は前号でも紹介した通り、国策として進められた移住によってできたコミュニティであり、特にこの第一アリアンサ村は長野県が土地を購入し移住を進めた村です。それなのに私は、この派遣が決まるまで、その存在を知りませんでした。今、ブラジルにいらっしゃる日系人200万人のなかにも日本語が話せない、あるいは移住の歴史を知らない方が大勢いらっしゃいます。一方で日本人の中にも私のように、移住の歴史やブラジルに長野村と呼ばれる村があることを知らない人がいます。今後おそらくどんどんお互いに移住についての関心が薄れていってしまうように思います。私たちの祖父母あるいはもっと前の世代の方々が、遠いブラジルの地に移住し、ブラジルの社会に貢献し、日本への帰郷の思いをもち、あるいはブラジルで日本人としての誇りをもって生活されてきた歴史の中で、世代が変わるにつれて日系社会がブラジル社会に同化してしまうのはとても寂しい気がしてなりません。アリアンサの理念である、ブラジルとの共同・共生の精神は、日本からの移住者であるというアイデンティティを大切にしながらブラジル社会と共に歩み、生活していこうとするもののように思います。そのような日系社会のコミュニティを後世にもつなげていくためにも、日系社会の人々だけの問題ではなく、私たち日本人がその歴史と偉業を後世に伝えながら、日系社会と交流をしていくことが大切なのではないかと思いました。この通信を読んで、少しでもアリアンサ村、日系社会に興味をもっていただければ幸いです。なお、11月20日にはアリアンサ入植95年の入植祭（記念式典）が行われる予定です。

写真は、アリアンサ開設の中心になった人物の一人、永田稠氏のことで、弓場農場の資料館に保管されています。

